

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「吾一は、汽車の走っている鉄橋にぶら下がることを友だちの前で約束してしまった。」

「おめえ、ほんとにやるのけえ」

しばらくして、京造が言った。

吾一はやるとも、やらないとも言わなかった。

「あんなことをやると、おめえ、死んじゃうぞ。」

ちくしょう、何を言っているんだい、と吾一は腹の中で思った。死のうと、生きようと、かってじゃねえか。今になって何を言やあがるんだい。おらあ、——おらあ、——^{問一}彼は、^{かれ}なんだか胸がせまってきた。しかし、京造の前でなみだなんか見せては、はじである。目のまわりがみょうにうるんできたが、彼はまぶたをばちばちさせて、そんなものを追っばらってしまった。

「だから、おめえがな、やめてえと言うんなら、おれ、作ちゃんに話してやってもいいぜ。——どうだい。あんなこと、やめにしちゃ……」

吾一は自分の耳を疑った。これが、——ほんとうに京造のことばなのだろうか。彼は思わず京造の顔を見た。

「ああ、京ちゃん、そうしておくれよ。おらあ、そうなると、どんなに助かるかしれねえんだ」

彼はすぐ、そう言いたかった。が、彼の舌はそう軽く動かなかった。^{問二}彼はくちびるをかんだまま下を向いてしまった。なみだがぼろっとこぼれた。

彼には京造のことばが、——あわれんで言っているのか、親切でいってくれているのか、よく、のみこめなかった。親切ならうれしいが、見さげられているのだと、あわれまれているのだと、がまんができなかった。

おれはしょっちゅう見さげられているんだ、という考えが、彼のあたまには、こびり付いていた。おとつつあ

んはうちにいないし、おっさんは内職をしている。そして、おれのうちは路地の中だ。そんなことを面と向かっていうものはないけれども、だれかがどこかで、そうっといっているような気がして、しかたがないのだ。だから、彼のちいさいからだのなかには、ことごとにはね返してやろう、はね返してやろうとする精神が、常に燃えていた。彼が学校で一番になっっているのも、一つはそのはね返してやろうが、彼を一番にさせているのだった。

きょうだってそうである。何もこんな事なんか、言いださなかったってすんだのに、作次たちに負けるのがいやで、つい、よけいなことを言ってしまった。しかし、ここへきては、もうよけいなことでは、すまされない。いま彼はいのちがけの事にぶつかっているのだ。けれども、なあに、やってやれない事があるもんか、という気の張りもどこかにあった。手ばなしで橋のランカンをわたるよりは、まくら木につかまるほうが、——しっかり、つかまっていさえすれば、つかまっているだけに、まだしも、こっちはうが安全だという気もちが、腹の底のほうで、かすかにしていた。が、なんといったって、やらずにすめば、それにこしたことはないのだ。京造のはからいで、うまく、こいつがやめになってくれれば、こんなありがたいことはない。けれども、「あいつにはできそうもないから、おれがとめてやったんだ」「あいつがかわいそうだから、作ちゃんに話してやったんだよ」と、言われるのでは、なんとしても腹の虫がおさまらなかった。

あっちを考えた、こっちを考えた、彼にはどう返事をしているか、決心がつかなかった。彼は首をたれたまま、いつまでも、もじもじしていた。

「おい、どうするんだい」

京造は待ち切れないように、はや口でいった。

「う、うん。——」

吾一には、まだ、きっぱりとした返事ができなかった。

京造はじりじりしてきた。好意を好意として、すばっと受けてくれないことが、彼にはおもしろくなかった。

しばらくして、吾一はひたいをあげた。あい手の顔いろでどっちにか、きめようと決心したのだ。ところが、^{問四}彼がひたいをあげたとたんに、京造は口をとがらせた。

「ふム、じゃ、どうしてもやるんかい」

彼は吾一の血ばした目の色を見て、そう直感したのだ。

^{問五}「えこじだなあ、おめえは」

^{問六}投げつけるように言ったと思うと、京造はすたすたと向こうへ行ってしまった。

吾一はどきっとした。それこそ、ほんとうに鉄橋から、まっさかさまに、落っこちたような気もちだった。

「吾一ちゃん、だいじょうぶ」

とちゅう、おきぬは心配して、のぞきこむように彼に言った。

吾一はなんにも言わなかった。ただもくもくとして、ウチダ川のほうへ歩いていった。

やがて、彼らは軒^{のき}の続いた町をはなれて、田んぼ道に出た。^{問七}かり取られたあとの田は、毛をむしり取られたあとの、けもののはだを見るようで、いかにもさむざむとした感じだった。

ウチダ川の鉄橋の近くまで行った時だった。向こうのクヌギ林のなかから、黒いけむりをはいて、汽車がやってきた。

「あっ、汽車だ」

「ばんざあい！」

みんな手をあげてさげんだ。「ばんざい」と言わなかったのは、吾一だけだった。

「おうい、みんなかけろ」

作次は、まっさきになってかけだした。

しかし、彼らがやっと、土手の下にたどりついたと思ったら、山くずれのような、すさまじい音を立てて、列車が彼らのあたまの上を通り過ぎた。ぼうしをアミダにかぶっていた秋太郎は、二、三間もぼうしをふき飛ばされてしまった。

おきぬも花カンザシを、あやうく飛ばされるところだった。彼女はもう、それだけで、すっかりおびえてしまった。

「よそうよ、こんなこと。——あたし、もう……」

重い車輪が、ゴットン、ゴットン、目の前をまわって行ったことを思い返すと、人間が鉄橋にぶらさがるなんてことは、彼女は思っただけでも、ぞうとした。

「よすなんてことあるかい」

京造はおきぬの前に立ちほだかって、しかりつけるような調子でどなった。

問八 「吾一ちゃんがやるって言ったんだから、やらねえってことがあるもんか。やらなきゃ。おれが承知しねえぞ」

「おいしいことをしたなあ」

作次はうらめしように、停車場のほうへ行った汽車のあとをにらめていた。

「もう少し早く、くるとよかったんだな」

「ううん、そんな事はねえよ。今にきつとの、ぼりがやってくるよ。すれちがいだもの」

京造はそう言いながら、土手の上にあがって行った。そして背のびをして停車場のほうに、遠く目を放った。

線路がひとすじ、とちゅうで少し曲がっているけれど、向こうにずっとびているだけで、中間には、目をさえぎる物は何もなかった。葉をふるい落とした、ちいさい林の向こうに、プラットフォームのトタンやねが、

水たまりのように白く光っていた。もうそのかけにはいってしまったのか、いま行った汽車の姿も見えなかった。

「おうい、だれか、馬になれよ」

彼は土手の上から大きな声をだした。すると、四、五人ばらばらとのぼって行った。

彼らは騎馬戦の時のように、すぐ騎馬を組んだ。京造は馬の上で手をかざしながら、しきりに西のほうを、い

察していた。

「きた、きた」

やや、しばらくして、敵軍を発見したように、彼は勇みたって報告した。

「けむりが見える。——なあ、みんなにも見えるだろう」

「うん、見える。見える」

と、馬もいっせいにさげんだ。

「おい、吾一ちゃん。早くぶらさがれよ。あいつが停車場にはいると、すぐ、こっちへやってくるんだから」

京造は馬を飛びおりながら言った。

「おい、吾一ちゃん。どこに、いるんだ」

吾一は返事をしなかった。彼は土手の下の芝しばばらに足を投げだして、田注二のくろをながめていた。

おきぬは、みんなが土手の上にあがった時に、にげて行ってしまった。彼女は吾一にも、いっしょににげるようにすすめたけれども、彼は動かなかった。にげればにげるすきはあったのだが、にげることさえめんどくさかった。

ちくしょう、死んだって、かまうもんか。——だれも彼も、みんな死んじまえ。おお火事が起こって、この町そっくり焼けっちまえ。

まわりの人間も、まわりのものも、目にはいるものが、残らずおもしろくなかった。^{問九}ちくしょう！ちくしょう！という気もちだけが、あばら骨のうしろでいきをしていた。

「なんだ。そんなところにいたんか。早くあがってこいよ」

京造が上のほうから言った。

吾一はだまっていた。

「おい、汽車がくるぞ」

作次のするどい声が飛んできた。吾一は反射的に、すっと立ちあがった。立ちあがったひょうしに、^{（注3）}「精神一到」という、ふるい格言がいなずまのように、彼のあたまのなかを通り過ぎた。彼は大きく目を開いて、まぶたをぱちとやった。彼はつつたまま、遠くの山を見つめていた。^{問十}あい色の連山の向こうに、雪をかぶった山が、背のびをして、こっちをのぞいていた。吾一はその白い山を見ていたら、ひとりでおじぎがしたくなつて、おじぎをした。

いつ、つかんだのか、彼はかれ枝を一本、無意識ににぎっていた。^{問十一}そして無意識に、そいつを両手で、ポキーンとへし折った。それから、彼は土手にあがって行った。

今までは、田んぼなんて、なんとも思っていなかったのだが、土手の上に出たら、その見なれている田んぼが、急に、ちがった姿で彼の前にあらわれてきた。^{問十二}いや、田んぼだけではない。クヌギ林も、ダイコンばたけも、遠い山も、近い丘も、何かしみじみと胸にせまってきて、目のうしろが熱くなった。

太いヘビが二ひきならんでいるような、ぶ気味な線路のあいだを通って、吾一は鉄橋のほうに歩いて行った。そしてまくら木を三つ四つ、またいだら、下からふわっと、つめたい風がふきあげてきた。

彼はいやあな気もちになった。彼はそのまま、まくら木の上にしゃがんでしまった。

（山本有三『路傍の石』）

〈注1〉長さの単位。一間は約一・八二メートル。

〈注2〉田の境。あぜ。

〈注3〉「精神一到何事か成らざらん」。精神を集中して努めれば、どんなことでもできないことはない。

問一 部「彼は、なんだか胸がせまってきた」ときの「吾一」の気持の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 思ってもみなかった京造のやさしい言葉が身にしみて、京造の忠告に従ってやめようかどうかどうしようか迷ってきている
- 2 心のおくにしまいこんでがまんしていたやりたくないという気持が、急にふくらんでおさえがなくなってきた
- 3 やるかやらないかはあくまでも自分の意志で決めたかったのに、横やりを入れられていらいらがつづいてきている
- 4 京造の言葉で初めて大変なことになったと気づいたが、なんとしてもやりとげようという意志が強くなってきた

問二 部「彼はくちびるをかんだまま下を向いてしまった。なみだがぼろっとこぼれた」ときの「吾一」

の気持としてふさわしいものに○、ふさわしくないものに×を書きなさい。

- 1 自分の考えのあさはかさを京造にさげすまれてくやしい
- 2 やめたいという思いを京造に理解されず悲しい
- 3 やめようと京造から作ちゃんにたのんでもらうのがなげない
- 4 ほんとうはやりたくないし京造に助けてほしい
- 5 自分の決意をゆるがそうとする京造がにくらしい
- 6 京造のことばにすぐとびつくような弱みをみせたくない

問三 部「彼のちいさいからだのなかには、ことごとにはね返してやろう、はね返してやろうとする精神

が、常に燃えていた」とありますが、「はね返してやろうとする精神」とはわかりやすく言うところのどのような精神ですか。

問四 部「彼がひたいをあげたとたんに、京造は口をとがらせた。『ふム、じゃ、どうしてもやるんかい』」

とありますが、このときの「京造」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 吾一がやるなら自分は高みの見物をしてやろうと思いつき、わざとやめられないよう仕向けている
- 2 なんとしても吾一に危険なことをさせまいとするあまり、ついきびしい態度をとってしまっている
- 3 吾一が自分に助けを求めていることを感じ取り、吾一のずるさにいかりがこみあげてきている
- 4 せっかく助けてやろうとしたのに吾一は受け入れないと見きわめて、いらだちが頂点に達している

問五 部「『えこじだなあ、おめえは』。投げつけるように言ったと思うと、京造はすたすたと向こうへ行ってしまった」とありますが、このときの「京造」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 吾一の態度にひどく気分を害して、もはや吾一を見放してしまっている
- 2 吾一のやることに関わるのをおそれ、責任のがれをしようとしている
- 3 あくまでも冒険をしようとする吾一に、おろかさを自覚させようとしている
- 4 意志が弱いと思っていた吾一の意外ながんこさに、あきれてしまっている

問六 部「吾一はどきとした。それこそ、ほんとうに鉄橋から、まっさかさまに、落っこちたような気もちだった」とありますが、このときの「吾一」の気持の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 さっきまでやさしかった京造の態度が急に変わり、とまどいとあせりで動ようしている
- 2 もう絶対にやめられないのだという事実を身にしみて知り、孤独と絶望を感じている
- 3 やりたくないと言えず自ら危険な道を選んだことに、後かいと情けなさを覚えている
- 4 本心を見ぬく友だちすらいな現実^{じじ}に傷つき、悲しみと敗北感にうちのめされている

問七 部「かり取られたあとの田は、毛をむしり取られたあとの、けもののはだを見るようで、いかにもさむざむとした感じだった」という一文は、ここでのどのような働きをしていますか。

- 1 いよいよ始まろうとする吾一の挑戦^{ちせん}が危険をとまなう命がけのおそろしいものであることを暗示している

2 助けてくれる者も自分を守る手立てもないままむぼうな冒険をしなければいけない吾一の暗い気持を象徴^{ちやう}している

3 これから訪れるかこくな冬をのりこえるにはあまりにもよゆうのなかった当時の人びとの貧しい暮らしぶりを印象づけている

4 たがい^{たがい}に本音を語り合うことができずにすれちがってしまった京造と吾一の冷え切った関係をたとえている

問八

部「『吾一ちゃんややるって言ったんだから、やらねえってことがあるもんか。やらなきゃ。おれが承知しねえぞ』とありますが、このときの「京造」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 吾一の挑戦を後押しすることであくまで自分が主導権をにぎっていることを皆にわからせないではおかしいといきがつている
- 2 せっかく吾一がやると言っているのに、おきぬがやめようと言い出したのが気に入らず、おせっかいなおきぬをさとしている
- 3 あえて危険なことを進んでしようとする吾一の考えが理解できないが、結果を見てみたくなり、やってみることを強くながしている
- 4 自分の好意をまったく受け入れようとしなかった吾一への腹立ちがおさまらず、絶対に吾一に挑戦させずにはおかまいと意地になっている

問九

部「ちくしょう！ ちくしょう！ という気もちだけが、あばら骨のうしろでいきをしていた」とありますが、このときの「吾一」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 幼いころから自分を見下してきた周囲への嫌悪感が、激しい憎悪へと胸の中で変化している
- 2 自分で自分を死においこんだおろかさへの後かきを、心のうちでどうしても消せないでいる
- 3 絶体絶命の状況のようにあってもあらゆることをはね返す精神を、心のおく底に確かに持っている
- 4 助けようともしない友だちのはく情さに、やり場のないかりが腹の底からわきおこっている

問十

部「あい色の連山の向こうに、雪をかぶった山が、背のびをして、こっちをのぞいていた。吾一はその白い山を見ていたら、ひとりでおじぎがしたくなって、おじぎをした」とありますが、「吾一」はなぜおじぎがしたくなったのですか。

- 1 冷たい雪をかぶりぬきんで高くそびえ立つ白い山の力強さと気高さが、ひとり命がけの挑戦をする自分の心にしみたから
- 2 暗い連山の向こう側に見えた白い山の明るさが、激しくゆれ動いていた自分の心をおだやかにし、希望を感じさせたから
- 3 ほかの山と異なり、雪をかぶってひとときわ神聖に見える白い山を拝むことで、命がけの冒険がうまくいきそうな気がしたから
- 4 連山に守られるようにそびえ立っている白い山を見ているうちに、自分もほんとうは孤独ではないのだと思えてきたから

問十一

部「そして無意識に、そいつを両手で、ポキーンとへし折った」ときの「吾一」の気持を二十字以内で書きなさい。

問十二

部「いや、田んぼだけではない。クヌギ林も、ダイコンばたけも、遠い山も、近い丘も、何かしみじみと胸にせまってきて、目のうしろが熱くなった」ときの「吾一」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 死をも覚悟しなければならず、もう二度と目に映るけしきのような平和な日常はとりもどせないと思ひ、悲しみにうちひしがれている
- 2 危ないことをして死ぬかも知れないから、このけしきを見るのも最後だと思うと、見るものすべてがいとおしくなっている
- 3 死をおそれることなく困難に立ち向かう自分に、周囲の自然すべてが力をあたえてくれているように感じ、うれしくなっている
- 4 たとえ自分が死んでもこの自然は何も変わらないのだと思うと、自分のしようとしていることがなんともつまらないと感じている

問十三 この文章の後に続く「吾一」の物語を百八十字以内で創作しなさい。

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

人間は自分のいだいているイメージが裏切られるとガックリする。そのイメージがあざやかであればあるほど、ひょうしぬけは大きい。そこで人間は、本能的に自分の持っているイメージに合わせて対象を見ようとする。つまり、自分のイメージに合わないものごとを、意識的に、あるいは無意識のうちに無視したり、切り捨てたりするのである。

話とはぶが、ぼくはよく世界各地を遺跡^{せき}をたずねて歩く。ところが胸にえがいていたイメージと実際の遺跡と

は、たいてい、くいちがっている。だからぼくの遺跡への旅は、ほとんどが落たんと失意の旅である。せっかくやって来たのに、イメージとまるでちがっているのは、なんともやるせないものである。けれども、ぼくは思い直して、実際は実際なのだと自分にいいかせる。そうすると、それはそれで、またおのずから別のイメージを生み出してくれるのである。

ぼくは遺跡の写真を何枚も撮って帰り、それをカメラ好きの友人に見せた。すると彼は一見して、

「こりゃだめだな、使いものにならんよ」と、さも軽べつしたようにいった。そして、ぼくにこう教えた。

「カメラというのはね、^{問一} 労をおしんじやいけないんだよ。ほんのちょっと移動してみる、あるいは高さを変えて撮る、そうすればいい写真になるんだ。見ろよ、電線が入っちゃってるじゃないか。これじゃ、ぶちこわしだよ。こんなものはよけて撮らなくちゃあ」

なるほど、メソポタミアの最も古い遺跡、ウルのジグラットを撮ったぼくの写真には、電線がちゃんとうつっているのである。エジプトでスフィンクスを手前におき、ピラミッドを向こうに望んだ写真には、電線どころか電柱までが、はっきりうつっている。そこで友人は舌打ちをしたのだ。

^{問二} しかし考えてみると、それはおかしいことではないか。写真というのは現実の姿を、ありのままにうつしとるものである。ぼくはここでややこしい写真芸術論をブツつもりはないが、たいていの人たちは、写真を見るときに、それを現実の姿を、そっくりうつしとったものとして見る。それなら、どうして電線がうつっていないのか。そのほうが現実の遺跡の姿を、それこそリアルにうつし出しているわけではないか。

^{問三} だが、写真というのは、じっさいをうつすものではない。人びとは自分の目でありのままを見ているつもりになっているが、じつは、自分の目以上に、自分のイメージで対象を見ているのである。そして現実の事物が自分のイメージどおりだったときに、はじめて、それをなまなましい現実だと思い、反対に、それが自分の

イメージといちじるしくちがっていると、むしろ現実を非現実的のように思ってしまうのである。つまり、人間にとっては、自分のいだいているイメージのほうが、現実そのものよりも現実的なのだ。だからシュメールの聖塔や、エジプトのスフィンクスをうつした多くの写真を見たとき、友人は舌打ちしたのである。それは彼にとっては、遺跡にあるまじき風景であり、およそ非現実的のように思われたのだ。

そういえば、何人かの仲間と遺跡の前に立ったとき、多少とも写真の心得のある連中は、必ず電線だの、電柱だの、マイクロバスだのをよけてカメラを構えた。そして、口ぐちにこうつぶやいていた。

「ちえっ、あんなところにバスをとめやがって……」「まずいなあ、どうやっても電線が入っちゃう。そうだ、バスの屋根から撮ってやれ」うんぬん。

ぼくはここで、事実とは何か、真実とは何か、といったむずかしい問題を論じようとは思わない。ぼくがいたいのは、冒頭に述べたように、何かを取材するときに、イメージというものが大きな働きをする、ということなのである。取材とは、ある意味では、自分のいづくイメージとの戦いである、といってもいい。

だからといって、ぼくはイメージというものが取材のじまになり、マイナスの効果しか持たないというのはない。人間はイメージの動物である。イメージによって、いや、イメージによってしか対象を認識することができないのである。だからこそ、詩人ならともかく、ジャーナリストにとっては、ものごとについての自分のイメージを、ことあるごとに反省するということが大切なのだ。(中略)

だが、それはなかなかむずかしい。自分のいだいているイメージとは、自分がつくりあげている世界そのものである。それを否定することは、自分を否定することだ。どんな人でも、自分をそうかんたんに否定できない。自分のイメージがくずれてゆくのをだれも好みはしない。

砂漠といえ、多くの人たちは、「果てしない銀色の砂の海」を思いえがく。ぼくもそうだった。そのイメー

ジにひかれて、ぼくはサハラへ出かけて行ったのである。だが、サハラは銀色の砂の海などではなかった。行けども行けども、ただ石ころだらけの褐色の不毛地がひろがっているだけなのだ。むろん「砂の海」もないわけではないが、その部分はサハラ全体のごく一部で、せいぜい七パーセントにすぎない。しかも、その砂は銀色ではなく、みょうに赤味を帯びた淡褐色だった。

ぼくの砂漠のイメージは見事に裏切られた。だが、その石ころだらけの不毛地や淡褐色の砂丘が、砂漠の新しいイメージをぼくのなかにつくりだした。その体験は、最初はひょうしぬけだったが、つぎにはべつのイメージの誕生だった。取材というのは、こういうものだと思ふ。

取材とは、既成のイメージがべつの新しいイメージに生まれかわる、その道行きのことなのである。

(森本哲郎『「私」のいる文章』)

〈注〉新聞・雑誌・放送などの編集者・記者など。

問一 ―― 部ア・イと同じ意味で用いられているものを選びなさい。

ア ひょうしぬけ

- 1 私は何も悪いことはしていないのになぜか先生にしかられてしまい、たいそうひょうしぬけだった
- 2 テストのために一生けん命勉強したのに、急にテストがなくなってひょうしぬけだった
- 3 今年は例年以上の厳しい暑さが続き、暑さに強い私もさすがにひょうしぬけしてしまった
- 4 まさか受かるとは思っていなかったオーディションに意外にも合格し、ひょうしぬけしてしまった

イ 労をおしむ

- 1 A君は労をおしんで自分の荷物に名札をつけておかなかったので、他人の荷物とまぎれてしまった
- 2 すばらしい記録を次次にうちたててきたB選手は、労をおしんでとつぜん引退を発表してしまった
- 3 先生は努力のかいあってコンクールに入賞したCさんの労をおしみ、全校生徒の前でたたえた
- 4 D君は労をおしんでこん虫採集にはげみ、だれにも負けないうりっぱな標本をつくりあげた

問二 — 部「それ」の内容を二十字以内で書きなさい。

問三 — 部「写真というのは、じっさいをうつすものではない」とありますが、何を写すものなのですか。本文中から十字以内でぬき出しなさい。

問四 筆者は、人間はどのようなものの見方をするものだと言っていますか。

問五 この文章全体の内容をふまえて、筆者が考える「取材」とはどのようなものを六十字以内で書きなさい。

〔三〕 次の各文は、どれも表現が適切ではありません。適切でない理由をそれぞれ後から選びなさい。

- ア この電車の次の停車駅は石川町にとまります。
- イ 私は京都で姉から借りたカメラをなくしてしまった。
- ウ 江の島の海で泳いだり丹沢への登山が私の夏休みの思い出です。
- エ あなたには青いセーターより赤いセーターの方が全然似合っている。

(理由)

- 1 並んで述べられている部分が同じ形になっていない
- 2 主語と述語が正しく対応していない
- 3 うち消しの表現を必要とする修飾語がうち消しが無いのに用いられている
- 4 修飾語がどこにかかっているかがはっきりしない

〔四〕 次の — 部1～6のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また — 部7～10の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

災害をカソウしたクンレン	1	2							
富士山のソッコウジョ			3						
シャザイの言葉				4					
社会のエキになる運動		5							
シュクガ行事			6						
家屋				7					
空回り					8				
委ねる						9			
育む							10		

番 号	
氏 名	

11

14 7272

[illegible][illegible]

ア
イ
ウ
エ

9

9	5	1
ねる		
10	6	2
む		
	7	3
	8	4
	り	